



審査講評

第五十八回展審査部長

加藤 東陽

第五十八回全日本書初め大展覧会展において、栄えある賞に輝いた皆さんに心からお祝い申し上げます。

今年は、席書の部二千八十六点と公募の部一万千八百七点、合わせて一万三千八百九十三点の力作が寄せられました。特に、「席書の部」では、新型コロナウイルス対策のため、会場に入場制限を加えるなどしての実施となりましたが、虎の年にふさわしく一所懸命、書初めに挑む皆さんの姿から、希望にあふれる力強さを感じました。

審査会は、日本武道館において二十名の審査委員によって「席書の部」は一月六日に、「公募の部」は同二十三日に行われました。その結果、内閣総理大臣賞は高山倫さん（席書の部）、日本武道館大賞は坂口優乃さん（公募の部）、文部科学大臣賞には宮口拓己さん、屋代真由さん（席書の部）、奈良ひよりさん、山根由衣さん（公募の部）が受賞されました。誠におめでとうございます。

次に、「席書の部」と「公募の部」における各部門の審査主任の所感を申し上げます。

幼児・小学校の部の「席書」では、紙面いっぱい力強い筆力の作品が多く見られた。また例年に比べ、「公募」では全国各地から多くの出品があったことは嬉しい。

中学校の部では、全体を通して楷書が少なく、行書作品が大半を占めた。特に、中一では文字の大小や線の太細など、いろいろな書きぶり、行書に取り組んでいる意欲作が多く見られた。

高等学校の部では、各学年共に多字数で漢字（篆・隸・楷・行・草書）臨書作品が急増し、レベルアップすると共に上位の賞を占めていた。来年は仮名や漢字仮名交じりの書への挑戦にも期待したい。

大学・一般の部は、仮名や漢字仮名交じりの書の出品が少なかった。漢字の書では、台湾からの出品を含め様々な書風（書きぶり）の作品が数多くあり、多様な表現と共に質の高まりを感じた。

終わりに、本展覧会開催にあたり、ご支援・ご協力いただきました関係各位に心から感謝申し上げます、審査講評といたします。